地域の特色が融合するまち「蔵王町遠刈田温泉」

【宮城県刈田郡蔵王町遠刈田温泉】
一般社団法人とおがったプロジェクト

コロナ渦における実験と検証により浮き彫りとなった地域文化の継承

蔵王町は宮城県の南西部に位置し、町域の約 6 割が山林・原野のまち。現在、人口は 1 万人程度である。県内有数の景勝地である「蔵王の御釜」、及びその麓にある遠刈田温泉を有する観光地である。農業においては、桃や梨といった果物を含め、多くの農産物の生産量が宮城県で一番多く、美味しい食べ物にも恵まれた町でもある。

蔵王の御釜

（提供：みやぎ蔵王観光）

蔵王町遠刈田温泉（ざおうまちとおがったおんせん）地区（以下、「遠刈田温泉」）は、開湯 400 余年になる歴史ある温泉街であり源泉かけ流しのお湯が味わえ、昭和 56 年から経済産業大臣指定伝統的工芸品である「宮城伝統こけし」のうち、遠刈田系伝統こけし発祥の地でもあり、温泉と伝統のまちである。

地域のイベントとして 100 年以上続く「仮装盆踊り」が地域コミュニティ維持の大きな支えとなっていた。しかし、令和 2 年に発生した新型コロナウィルス感染症の感染拡大防止等により、「仮装盆踊り」の開催が中止となったため、地域住民が集まる機会が失われてしまい、地域コミュニティが希薄となっていった。

さらに追い打ちをかけるように観光客の減少による影響で小売店が３件閉業となり、飲食店も令和５年中に１件閉業した。

そうしたコロナ禍等をきっかけに一般社団法人とおがったプロジェクト（以下、「とおがったプロジェクト」）はアーティストインレジデンス(以下、「AIR」)を活用した事業を令和２年から準備を行い、令和３年に本格稼働した。AIR とは、国内外のアーティスト等が一定期間地域に滞在し、様々な交流を通して創作活動や将来の創作活動に有益となるプログラムを提供し、活動を通じて地域に文化芸術の創造・発信拠点を形成するとともに、文化芸術を基幹とした地域活性化を図ることを目的とした事業である。

既に空き店舗となっていた旧魚屋を改装し、そこを拠点に国内外様々なアーティストを令和３年から令和４年で 28 名ほど招聘してきた。アーティストの作品制作の一貫の中で、アーティストが地域の人が集まる場所などに足を運ぶことで、商店街の方々とのコミュニケーションが生まれたり、時にはアーティストの作品に協力を頂いたりした。こうした AIR 事業を通して、「アーティストの視点から地域の魅力を再認識する」効果は、２年かけて徐々に地域内に浸透していき、少しずつではあるが、地域の中での活気が取り戻されていった。

また、若者の地域離れの問題についても解決を図るべく、AIR 事業を地域内の小中学校へも展開させ、地域の子どもたちとアーティストがコミュニケーションを取ることで、多様性の教育としての機能も果たしていった。

アーティストと子供たちが遊んでいる様子

（提供：一般社団法人とおがったプロジェクト）

一方で、AIR 事業を行う中で、致命的な課題も見つかった。それは遠刈田温泉の文化がアーカイブ化されていないことである。具体的には「遠刈田温泉の歴史の変遷」や「過去に遠刈田温泉にあった文化や建物」などで、それらが郷土史などの資料に保存されてなく、調査に非常に苦労したことから判明した課題である。

また、地域の子どもたちがアーティストのプログラムに積極的に関わる中で、多様な視点は学ぶことが出来ても地域のアイデンティティの醸成には繋がらないリスクがあることも長期的な課題であることに気付いた。

そこで地域イベントの中止により失われつつある地域コミュニティを再生することや地域文化をアーカイブ化することで、地域文化を学ぶ機会の醸成や地域課題の解決へと繋がっていくのではないかと考えた。

地域住民がアーティストの演奏を鑑賞している

（提供：一般社団法人とおがったプロジェクト）

４年ぶりの仮装盆踊り大会と地域文化のアーカイブ化

地域コミュニティの再生を目的とした仮装盆踊り大会を４年ぶりとなる令和５年８月に開催するにあたり、とおがったプロジェクトは、中小企業庁が実施していた「令和４年度面的地域価値の向上・消費創出事業」を活用し、域外需要増加に向けたリピーターやファンの獲得、翌年以降も継続して参加へと繋げていくためのプロモーションとアーカイブも実施していく方向で進めていった。

プロモーションとしては地域デザイナーを活用し、仮装盆踊りの歴史のリサーチの実施及び、ポスターやチラシなどのデザイン制作を依頼した。仮装盆踊りへの参加だけではなく、仮装盆踊り開催後も地域の商店を利用してもらうために、チラシの裏面に「商店街食べ歩きマップ」などのガイドも掲載し、商店街の域外需要増加へと波及させる取り組みも行った。

仮装盆踊り大会まであと１か月となった７月、制作したポスターやチラシを地域内外に掲示・配布した。このチラシが地域住民の中でちょっとした話題となった。その話題となったチラシは仮装盆踊りを昔と現代で対比させるようにデザインされており、そこに写る若い踊り子たちは現在も遠刈田温泉に住む地域住民やその祖父母であった。チラシを見た地域住民がかつての仮装盆踊りを懐古することで、住民同士のコミュニケーションが生まれ、仮装盆踊り大会の開催に胸を躍らせた。

仮装盆踊り大会チラシ

商店街食べ歩きマップ

（提供：一般社団法人とおがったプロジェクト）

４年ぶりの開催ということで不安や心配を抱えながら迎えた仮装盆踊り大会当日、朝から決行の判断に苦しむような雨が降っていた。仮装盆踊り実行委員会は協議を重ねた末、予定どおり開催することを決定。そこには「４年ぶりだから」という理由だけでなく、20～30 近い団体と 170 名近くの踊り子が仮装盆踊りへの参加を申込みしていることもあって、楽しみにしている参加者や地域住民の期待に応えたいという思いもあった。

メインである仮装盆踊りが始まる夜になると雨は弱まっており、４年ぶりとなる仮装盆踊り大会は盛り上がりをみせ、無事決行することできた。地域住民と踊り子が楽しむ様子や笑顔を目の当たりにして仮装盆踊りの開催が地域住民の結束や盛り上がりを創出するきっかけとなること、そして地域住民が遠刈田に愛着を持っていることを確信した。

４年ぶりに開催した仮装盆踊り大会の様子

（提供：一般社団法人とおがったプロジェクト）

アーカイブ化するための取り組みとしては動画コンテンツ制作を実施した。仮装盆踊りの様子はもちろんのこと、お囃子の演奏を担当している地域の櫓会の練習風景、盆踊り保存会の練習風景、実行委員会の作業風景なども記録し、次年度開催へ向けた PV の制作も行った。

記録した動画コンテンツは資料としてこけし館に譲渡し、常設展示コンテンツの一つとして機能させていく。資料としての動画は来訪者へ一年を通して地域伝統である「仮装盆踊り」の魅力を伝えて行くことが可能となり、その結果、需要の獲得や各商店の収益増加へと繋げていく。

また、地域の小学校と検討を行い、翌年以降における学習プログラムの一つとしてカリキュラムへの組み込みを行う予定となっている。これにより、保護者もプログラムに関わることとなり、これまで参加するだけであった仮装盆踊りの魅力の再発見や再認識に繋がる。また、準備段階から関わる人員を増やすことでコミュニティの醸成へと繋がっていき、地域全体の活性化へと寄与していく。

アーカイブ化した動画の一部の場面

（提供：一般社団法人とおがったプロジェクト）

「遠刈田の人々」が反映される地域の情報拠点「Bus room」

バスの待合所は、以前はイスと時計しかなくただバスを待つためだけの空間であった。このバス待合所を地域外からのリピート促進も狙うビジターセンターも兼ね備えた空間へと変化させた。

パンフレットや小冊子などの情報紙を設置することで各商店への流れを作るほか、モニターを設置し、仮装盆踊りの PV やアーティスト作品のティザー映像を上映することで、地域の観光情報を短時間でインプットさせ、こけし館などの施設への回遊促進へと繋げる「温泉街の中心部であるこの場所に来れば色々な情報が得られる」場所として空間の有効活用を実施した。

まちに訪れた人に知的好奇心や興味を持ってもらうことを目的として、これまでの AIR 事業によりアウトプットされた作品や地域住民が制作した作品の展示も実施しているが、地域住民にとっての興味や関心にもなっている。展示作品を期間ごとに入れ替えているため、入れ替えをしている最中に通りかかった地域住民から「今度は何の展示になるの？楽しみなんだよね」と言われたり、自分の作品が展示されて喜びをみせたりする親子もいる。

作品が展示されているバス待合所「Bus room」

左（撮影：中小企業庁商業課）　　右（提供：一般社団法人とおがったプロジェクト）

アートと教育の融合から見えてきた地域のにぎわい創出とこれから

とおがったプロジェクトはアーティストと教育機関の融合に地域のにぎわい創出の可能性を見出した。

アーティストが発案した、公園で実施しているワークショップには老若男女が集まりにぎわいが生まれている。現在、月 1 回で公園にてワークショップを実施しており、対象は主に子どもたちで、費用が掛からず、長く継続できるような取り組みを意識している。気温の関係から 11 月でワークショップは終了するが、12 月中はイルミネーション開催に併せて、山からもみの木を切り取り、クリスマスツリーを制作し、モニュメントとして配置し、イベントを開催している。

また、公園以外でも２か月に１回、小学校の各学年を対象に１～２コマ（４５分×２）で授業を行っている。多種多様なアーティストと子どもたちが触れ合うことで、日本文化や外国文化に対する理解・興味を深めている。学校での交流があることで子どもたちが公園でのワークショップに参加しやすくなり、この場では通常のカリキュラムだけでは得ることのできない地域に対するアイデンティティが養われている。

子どもたちが放課後に公園に訪れ、アーティストと様々な遊びをしている風景は、地元住民への取組の「見える化」にも繋がっている。「見える化」されることで、地元民の理解・協力体制が深まり、イベントの企画・実施の際には、地域として一致団結して取り組むことが可能になった。

このように、アートと教育を融合させることで地元住民の理解醸成につながり、子どもたちの様々な文化や表現に対しての理解や興味、学校外での体験の質が向上するよう、より良い学習機会を提供し、町の中心にある公園を活用して観光客と地元住民、アーティストが集まることで、神の湯から公園や商店街に誘客に成功している。

温泉街の中心にある公園で遊ぶアーティストと子どもたち

（提供：一般社団法人とおがったプロジェクト）

遠刈田温泉は、様々な取組によって魅力的な商店が増えてきているが、遠刈田温泉に立ち寄ってもらうための仕掛けづくりを更にエリアとして推進するためには、各商店が個々のポテンシャルをより高めていく必要がある。新旧の店舗が入り混じっている温泉街・商店街は今まさに過渡期を迎えており、遠刈田温泉の５年後、１０年後に期待したい。

温泉街の中心にある公園

神の湯温泉

（撮影：中小企業庁商業課）